

九世紀前半の東部ユーラシア情勢と唐の内治のための外交

——吐蕃との長慶会盟、ウイグルへの太和公主降嫁の背景——

菅 沼 愛 語

はじめに

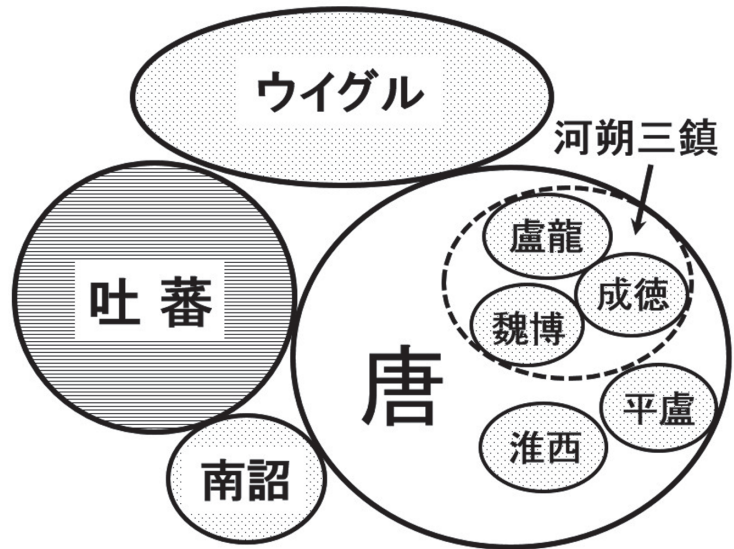
近年の歴史学研究の一つの潮流として、唐代の東アジア、北アジア、中央アジアをグローバルに捉え直す動きが活発化している。⁽¹⁾筆者も二〇〇九年以降、拙稿、拙著等により、東部ユーラシアという大域的な視点から、この時代の唐・吐蕃・突厥・ウイグル等の外交関係、及び、その推移等を論考してきた。⁽²⁾特に安史の乱（七五五―七六三）以後の唐は、藩鎮の乱が頻発し、それに伴い外交政策の重要度が高まり、東部ユーラシアの国際情勢も、より流動化し複雑化していった。

安史の乱終息後の七六〇年代から八三〇年代の唐を取り巻く国内外の情勢については、大雑把には【図1】のように描く事ができる。この時期の唐は、国内に河朔三鎮などの半独立的な反側藩鎮を複数抱え、藩鎮対策や財政再建が急務となり、国内秩序の再構築が重要課題となった。加えて、乱後は、西方の吐蕃、北方のウイグルが相対的に強大化し、外圧の脅威にも曝されたため、対外政策にも配慮しつつ国内問題に対処する構図となった。⁽³⁾そういった諸要因が複雑に絡まりあった結果、七八〇年代から八三〇年代の東部ユーラシアの外交関係は、

【図2】のように流動的に変遷していった。

多くの先行研究では藩鎮対策を主として唐の国内問題と見なして分析を重ねてきたが、筆者は前稿等で、安史の乱後の唐の内政と外交との相関に着目し、主として徳宗（七七九―八〇五）の時代に焦点を当てて、内乱と外交の関連性を論じてきた。⁽⁴⁾徳宗期の唐は、安史の乱による痛手からの回復が大きな課題であり、税制再建（両税法の施行）や藩鎮削減策を実施し、軍事上・財政上の改革を試みたが、その間に吐蕃と三度も会盟を行うなど外交面においても外患軽減のため積極的に行動した。例えば、徳宗時代の初期（七八一―七八四）、唐は頻発する藩鎮の乱に対応するため、吐蕃と会盟（建中会盟・奉天盟書）を締結している。（この時期の内乱と対吐蕃外交の相関については【図3】を参照。）そして、七八七年以降、唐は吐蕃と対立したため、今度は、ウイグルとは盟約締結（七八七）、及び、公主降嫁（七八八）、南詔とは会盟締結（七九四）を通じて各々和親し、対吐蕃で連繫する事で、唐・ウイグル・南詔による吐蕃包囲網を形成した（【図2・A】を参照）。

唐が厳しい内憂外患への対応を迫られる事態は徳宗以後も続き、憲



【図1】安史の乱後（760年代～830年代）、唐を取り巻く国内外の情勢

ルには、前皇帝の娘であり現皇帝の実妹である太和公主を降嫁させ、各々と和睦した。なお、長慶会盟は、唐・吐蕃間で結ばれた約十回の会盟のうち最後のものであり、長慶元年に長安、長慶二年（八二二）にラサで各々会盟締結し、長慶三年（八二三）に建てられた唐蕃会盟碑はラサに現存している。また、太和公主はウイグル（七四四～八四〇）に降嫁した最後の真公主（皇帝の実の娘）であった。そしてこれ以降、唐と吐蕃の間、唐とウイグルとの間に大規模な戦闘はなくなっ

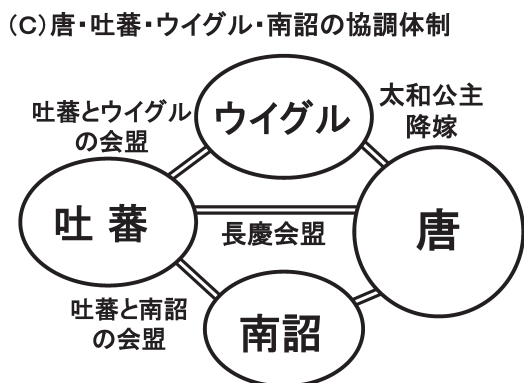
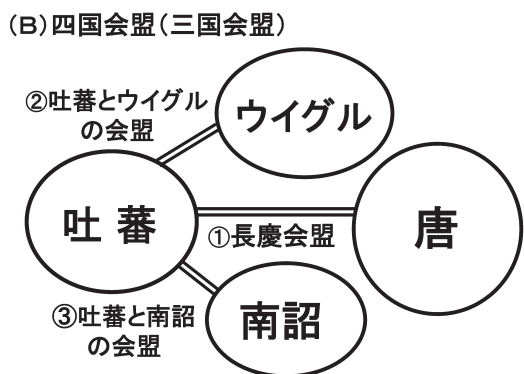
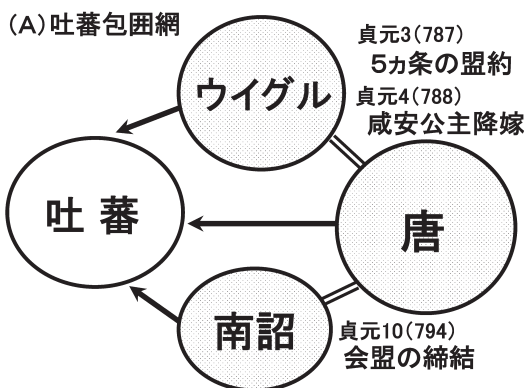
宗（八〇五～八二〇）、穆宗（八二〇～八二四）が、軍事上の脆弱性を外交で補い、難局を乗り切ろうとした。とりわけ穆宗は、長慶元年（八二一）、吐蕃と間で長慶会盟を締結し、ウイグ

た。つまり、唐にとって長慶会盟の締結と太和公主の降嫁は、安史の乱後、約六十年間続いていた厳しい外圧に終止符を打つ、画期的な外交政策であった。

なお、憲宗時代における唐と吐蕃の関係を、藩鎮対策とも関連させながら論じた研究としては、例えば、李天石氏、馬勇氏の論考がある。^⑥李天石氏は憲宗期の唐・吐蕃関係に注目し、憲宗は元和十二年（八一七）、淮西節度使・呉元済の乱を平定（淮西平定）したため、翌年の元和十三年（八一八）から対吐蕃戦を開始したと考察し、馬勇氏は、憲宗は吐蕃との関係を改善し辺境情勢を安定したため、反側藩鎮の排除に専念する事ができたと論じた。

また、長慶会盟に関しては山口瑞鳳氏、森安孝夫氏が、チベット語史料（『デガツェル祈願文』『仏教入門』）、及び、チベット側の史料である敦煌出土の漢語文書（ペリオ三八二九番）に基づき、吐蕃が唐と会盟を締結した時、ウイグルとも会盟を結んだと論考し、これを「三国会盟」と称した。^⑦しかし、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』等の基本的な漢籍史料には、唐・吐蕃・ウイグルが会盟を締結したという記述はない。詳細な記録を熱心に残す中華王朝が「三国会盟」に関する記録を残していないのは、いささか奇妙である。

この「三国会盟」については、最近、岩尾一史氏が、より明確な考察によって、吐蕃が唐と長慶会盟を締結した同じ時期（八二二～八二三）、ウイグル、南詔との間でも、それぞれ個別に会盟を締結した事【図2・B】、吐蕃は、唐がウイグル・南詔と連繫して構築した吐蕃包囲網【図2・A】を打破するため、ウイグル・南詔と会盟を結んだ事を論じた。また岩尾氏は、会盟には吐蕃、唐、ウイグル、南詔の四カ



※黒矢印は敵対、二重線は同盟や友好関係を表す

【図2】780年代～830年代の東部ユーラシアの外交関係の推移

徳節度使で相次いで反乱が勃発し、唐はその鎮圧に尽く失敗している。かつて、徳宗時代の唐は藩鎮の乱に腐心し、外圧の軽減を期し吐蕃と「建中会盟」を締結しているが【図3】、「長慶会盟」を締結した時の内

国が参加したため、吐蕃と唐、ウイグル、南詔の間で各々個別に行われた二国同士の会盟の総称を「四国会盟」と称した。更に岩尾氏は、吐蕃は、ウイグル・南詔との会盟を唐に妨害されないよう水面下でウイグル・南詔との和平交渉を進めた可能性がある事を指摘した。岩尾氏の考察のように吐蕃が唐に気取られないようウイグル・南詔との交渉を水面下で行ったとしたら、唐側も「四国会盟」の事を知らず、従って、漢籍史料に「四国会盟」に関する記録が残っていない事とも整合する。

以上を筆者の視点で総括すると、この時期は、東部ユーラシア諸国が、対外戦争の終息、敵対国家の牽制、外交的孤立の解消など、様々な理由により安定を求め、流動的ではあるが、「諸国間の和平」へと進んでいった。そして、この和平への大きなうねりは、実は唐の内乱

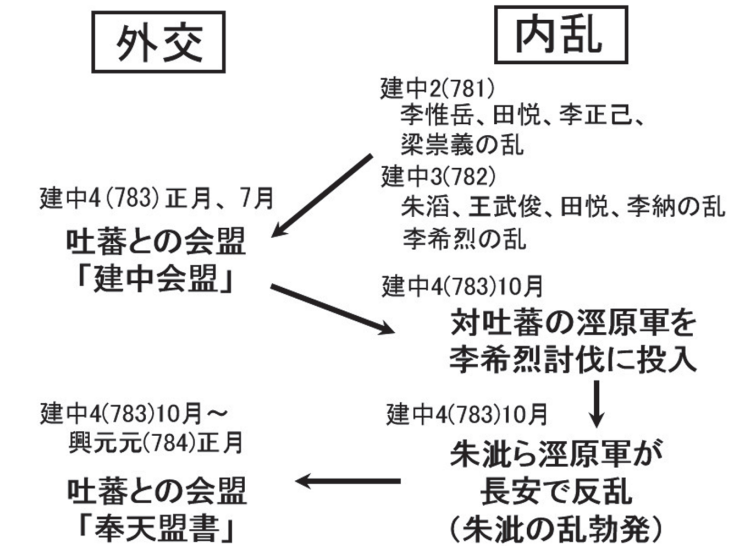
とも深く関係していた、というのが筆者の見解である。本稿は、八世紀後半の唐の内治のための外交を扱った前稿の自然な延長に位置するものであるが、筆者が九世紀前半の唐の外交と内治との相関を直接考える契機となったのは、以下の憲宗期・穆宗期の二つの事柄からである。

まず、憲宗時代では、李吉甫（宰相）、李絳（宰相）、白居易（翰林学士）が、藩鎮討伐の際、吐蕃・ウイグルに侵攻の機会を与えないよう留意すべきである、と進言している点である。当時すでに唐の政權中枢部で、藩鎮対策と外交の相関が強く認識されていた事は注目に値する。

次いで、穆宗時代では、唐が吐蕃と長慶会盟を締結（長慶元年十月）した直前の長慶元年（八二二）七月に、盧龍（幽州）節度使と成

外の状況は、徳宗期と同じ構図であり、唐は、厳しい内乱に対処するために吐蕃と会盟を結び、外患の終息を図った可能性も充分に考えられる。

その歴史的事実が意味する所は興味深いが、これまでほとんど注目されてこなかった。しかしながら、九世紀前半の唐の外交と内治を丹念に調べてみると、両者の相関は思いのほか強いようである。そこで本稿では、内憂外患に苦闘する九世紀前半の唐が、複雑に変化する国



【図3】徳宗時代の外交と内乱の相関：建中2（781）～興元元（784）
 （菅沼愛語『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移』293頁の図Ⅶ-6より）

内外の情勢のもと、内治を支えるために、どのような外交政策を展開していったのか見ていく事にする。

なお、本稿では、憲宗時代と穆宗時代の唐の内乱と外交の相関を、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『冊府元龜』『唐会要』等の基本的な漢文史料に加えて、『文苑英華』『全唐文』『白氏文集』等へのこる宰相李吉甫、白居易らの上奏文も用いて、可能な限り明らかにしていきたいと考えている。本来ならば、藩鎮の乱や吐蕃・ウイグルの動向など複雑に交錯する唐の国内外の情勢の推移を、時系列に従いつつ、包括的に論じるべきであろうが、それは筆者の手に余る作業であるため、本稿では幾分個別的看着していく事にする。まず、第一章で安史の乱後の国内秩序回復のための唐の外交を考察し、次に、唐にとって根幹となる藩鎮への対応策と吐蕃との外交を主軸に据え、第二章と第三章で憲宗期の藩鎮対策と吐蕃対策を取り上げ、両者の相関を考察する。ついで第四章で憲宗期のウイグルへの公主降嫁の問題を検討し、最後に第五章で穆宗の吐蕃との長慶会盟、ウイグルへの太和公主の降嫁、藩鎮への対策を関連させつつ論じていきたいと思う。

なお、憲宗から穆宗時代の吐蕃・ウイグル・藩鎮の動向の経過については【年表1】【年表2】【年表3】、長慶会盟の締結に至るまでの唐・吐蕃・ウイグル・藩鎮の動向、及び、その相関については【図4】にまとめた。引用史料の（ ）内は筆者の補足、〔 〕内は筆者の翻訳である。また、傍線は筆者が附した。

第一章 安史の乱後、国内秩序回復のための唐の外交

最初に、安史の乱後の唐の国内外の状況を整理しておく。安史の乱後の唐の国内情勢を俯瞰すると、河北に河朔三鎮（盧龍〔幽州〕・成徳・魏博の三節度使）、山東に淄青平盧節度使、河南に淮西節度使が、各々半独立の様相を呈していた【図1】。また、乱後、唐を取り巻く国外勢力の中で、とりわけ重視すべき強国は吐蕃とウイグルであった。この二大国は、時として藩鎮と結託し、唐に脅威を与える事もあった。

ウイグルは、安史の乱末期の宝応元年（七六二）、史朝義の誘いに応じて唐の北辺に襲来し、建中四年（七八三）⁹ 興元元年（七八四）にも、反乱を起こした盧龍節度使の朱滔に援軍を送り、朱滔軍と共に河北を襲撃した（『資治通鑑』巻二二九）。吐蕃も、元和元年（八〇六）、地理的に比較的近い四川で劉闢の乱が勃発した際、劉闢と通好した。劍南西川節度使の劉闢は、以前より吐蕃に賄賂を贈るなどしていたため、唐も劉闢と吐蕃の連繫を危惧はしていた。なお、劉闢は元和元年九月、唐軍に敗北したため、吐蕃への亡命を図ったが、その後、唐軍に捕まり処刑された¹⁰。

このように、安史の乱以降の唐においては、内乱と外交が交錯する様が具体的な事例の中にも見て取れる。そして、藩鎮と外国勢力が地理的に隣接している場合、両者の結びつきは比較的容易となる。だが、逆に、地理的に遠く離れた場所にある藩鎮と外国勢力が連繫する事は困難であった。

実際、かつて吐蕃は安史の乱の時、唐の内乱を好機と見て河西・隴

右を占領したが、安祿山や史思明と連繫する事はなかった。吐蕃は安史勢力の勢力圏である河北と地理的に遠く離れているため、連繫が難しかったと考えられる¹¹。吐蕃は、安祿山・史思明の後継の地となる河朔三鎮とも、かなり離れた位置にあった。このため、河朔三鎮の反乱や反抗に吐蕃が結びつく事はなかった【図1】。これは唐にとって幸いしたと言えよう。

このように、地理的な要因が内乱と外患の直接的な結びつきを阻んだと思われるが、両者は唐の政策決定の上で互いに影響を及ぼし合っていた。その点が、最も顕著に表れるのが徳宗時代である。そこで、この時期の内乱と外交の相関を以下に簡略にまとめておく¹²。

徳宗時代初期、唐が藩鎮に対し強硬策で臨んだため、河北・淮西等の藩鎮は猛反発し、建中二年（七八一）～建中三年（七八二）、相次いで反乱を起こした。ウイグルは、この頃、使節を唐に殺害されたため、反唐に転じ、反側藩鎮の朱滔を支援した。唐は、藩鎮の乱に苦闘した上にウイグルとも対立し、苦境に陥ったため、吐蕃と和睦交渉を行い、建中四年（七八三）の正月に清水（甘肅省）、七月に長安、その後ラサで、吐蕃と「建中会盟」を締結した【図3】。しかし、建中四年十月、長安で朱泚の乱が勃発したため、徳宗は奉天（陝西省乾県）へ逃亡した。徳宗は、「奉天盟書」で領土割譲等の大幅な譲歩を行うと、吐蕃から援軍を獲得し、吐蕃軍と連合して朱泚軍を撃破した【図3】。だが、その後、吐蕃が朱泚の賄賂を得て撤退したため、徳宗が約束不履行を理由に領土割譲を中止したところ、吐蕃は唐の盟約反故に怒り、報復のために偽盟を画策し、貞元三年（七八七）閏五月、「平涼偽盟」において唐の使者・將兵を殺害もしくは捕縛した。これ

【年表1】憲宗時代前半（806～816）における、吐蕃との会盟のための交渉、ウイグルとの公主降嫁を巡る交渉、藩鎮の動向と反乱

年代	吐蕃（唐との和睦交渉、及び対戦、吐蕃の国情）	ウイグル（唐との外交交渉、ウイグルの国情等）	唐の国情、唐の藩鎮対策、藩鎮の乱など
元和元（806）	正月、憲宗が吐蕃人捕虜70人を吐蕃に帰国させる。6月、吐蕃の使者論勃藏が朝貢。	10月、ウイグルが朝貢【冊972】。12月、ウイグルが朝貢【冊972】。	正月、劉闢の乱勃発。（このとき李吉甫が吐蕃の動向を懸念） 3月、楊惠琳の乱勃発。 9月、劉闢の乱平定。（劉闢は吐蕃への逃亡を図るが、唐軍に捕縛され刑死）
元和3（808）	12月、唐が鹽涇を行原州となす（吐蕃の入寇に備える）。	2月、威武公主の死去が唐に伝わる。5月、憲宗がウイグル可汗を登嚨里汧密施合毗伽保義可汗に冊立。12月、ウイグルが朝貢【冊972】。	
元和4（809）	5月、徐復を吐蕃に派遣。憲宗は平涼偽盟の時の捕虜（路泌と鄭叔矩）を返還するよう要請。 《元和4～5年、唐・吐蕃間で会盟のための交渉》	9月、唐から唐国中だったウイグル使節が、豊州の大石谷で吐蕃の1万餘騎に襲撃される。	3月、成德節度使の王士真が死去し、息子の王承宗が留後を自称。 4月、憲宗は藩鎮位の世襲を認めず、王承宗の討伐を検討。 7月、憲宗が王承宗討伐について臣下と議論。（このとき李絳が吐蕃・ウイグルの動向を懸念し、藩鎮討伐の危険性を指摘） 9月、憲宗が王承宗を成德節度使に任命。（成德から二州を削ると、王承宗が反発） 10月、憲宗が王承宗の官爵を剥奪し成德に討伐軍を派遣。《王承宗討伐の開始》 11月、呉少誠（淮西節度使）が死去。従弟の呉少陽が自ら留後となる。
元和5（810）	5月、吐蕃の大臣論思邪熟が来朝し、路泌と鄭叔矩の柩を唐に返還。鄭文延など13人も帰国。 6月、宰相の杜佑が吐蕃の使者と会談。 7月、李絳を入蕃使、呉軫を副使となし、吐蕃に派遣。	5月、ウイグルの使者伊難珠らに錦綵器服を賜う【冊976】。	3月、憲宗が呉少陽を淮西留後に任命。（河北に派兵中で余祐がなく淮西討伐できず） 3月、白居易が王承宗討伐の中止を献言。（このとき白居易は、吐蕃・ウイグルの入寇等を懸念） 7月、憲宗が王承宗を成德節度使に任命。《王承宗討伐を中止》
元和6（811）～元和10年（815）吐蕃の朝貢は絶えず		6月、ウイグルの使者に賜る【冊976】。	
元和7	この年、吐蕃が涇州に入寇し人畜を略奪。		
元和8（813）	この頃、吐蕃が、朔方靈塩節度使の王佖に賄賂を贈り、会州に烏喇橋を建設。	4月、伊難珠が公主降嫁を請願。憲宗が返事をしなかったため保義可汗が3千騎を率い鹽池泉に至る。唐は辺境防衛軍の警戒態勢を強化。 この頃、李絳が、吐蕃率領等のためにウイグルへ公主を降嫁させるよう説得するか、憲宗は許さず。11月、ウイグルが朝貢【冊972】	憲宗が、魏博節度使の田興に弘正の名を賜る。
元和9（814）			閏8月、淮西節度使の呉少陽が死去し、息子の呉元済が自立。 10月、憲宗が呉元済を討伐。《淮西討伐の開始》
元和10（815）	11月、吐蕃が互市を請願。憲宗はこれを許可。この年、吐蕃王チデソツェンが死去し、息子のチツクテソツェンが即位。	8月、ウイグルにに対し絹10万疋を馬価として支払う【冊999】。12月、ウイグルにに対し絹9万7千疋を馬価として支払う【冊999】	正月、憲宗が呉元済から官爵を剥奪し、宣武等十六道に呉元済討伐を命ず。
元和11（816）	2月、劍南西川節度使が、吐蕃王チデソツェンの死去とチツクテソツェンの即位を上奏。この年、吐蕃の尚綺心妃が、ウイグルの拠点近くに攻め込むが、チデソツェン王の死去を知り撤退。	正月、ウイグルが朝貢【冊972】。2月、ウイグルが馬を献上【冊972】。2月、絹6万疋を馬価として支払う【冊999】。2月、ウイグル使節に錦綵銀器を賜う【冊976】。4月、絹2万5千疋を馬価として払う【冊999】。 11月、宗正卿の李誠を入廻鶴使に任命【冊980】。この年、吐蕃軍がウイグルの拠点近くまで攻め込む。	正月、憲宗は、王承宗討伐のため、六道の兵を派遣。（王承宗が呉元済に連繫したため派兵。だが戦果はあまりなし）

※ [] 内は出典。略号は、冊972 = 『冊府元龜』 卷972外臣部朝貢5、冊976 = 『冊府元龜』 卷976外臣部褒異3、冊980 = 『冊府元龜』 卷980外臣部通好、冊989 = 『冊府元龜』 卷999外臣部互市。

により唐と吐蕃の対立は決定的となった。

このとき宰相の李泌が、ウイグル・南詔・大食・天竺と連合し、吐蕃包囲網を形成するよう進言したため、徳宗はウイグル・南詔との親善強化を試みた。ウイグルは、反側藩鎮の朱滔と連合し唐を攻撃した事もあったが、朱滔が唐軍に敗北すると、唐との和解を求めた。当時のウイグルは、吐蕃との間で中央アジアの覇権を巡って対立していた⁽¹³⁾。このため唐とウイグルは反吐蕃で連繫し、両国は貞元三年（七八七）九月、五カ条の盟約を交わし、貞元四年（七八八）、咸安公主（徳宗娘）が天親可汗に降嫁して、徳宗と可汗が父子関係を結んだ⁽¹⁴⁾。また、南詔は当時吐蕃の従属下にあったが、吐蕃から苛酷な徴兵等を受けたため反発心を募らせていた。そこで、唐は貞元十年（七九四）正月、南詔と会盟を締結し、貞元十七年（八〇一）、十万の吐蕃軍を撃破し、その半数を壊滅させて吐蕃に大打撃を与えた⁽¹⁵⁾。

以上のように、徳宗時代の唐では、吐蕃への外交政策と藩鎮の乱への対応策が密接に連動し、外交と内乱が交錯しながら展開した【図3】。また唐は、難敵の吐蕃に対抗するため、ウイグル・南詔への外交も展開し、吐蕃と対立するウイグル・南詔と連繫し、吐蕃包囲網を構築して吐蕃を牽制した【図2・A】⁽¹⁶⁾。

第二章 憲宗の治世前半の吐蕃対策と藩鎮対策との

関わり

―元和四年（五年）、唐・吐蕃間の会盟のための交渉を中心に―

憲宗は藩鎮抑圧策を断行し、安史の乱後、半独立の様相を呈した河

朔三鎮や淮西節度使を統制下に収めた⁽¹⁷⁾。それゆえ、その治世は元和中興と称され評価された。

このように憲宗が藩鎮対策に成功し、唐王朝の再興に尽力した事はよく知られているが、憲宗が吐蕃対策にも力を入れた事はあまり知られていない。しかし、憲宗は元和四年（八〇九）―元和五年（八一〇）―、吐蕃と会盟のための交渉を行っており、吐蕃との外交も重視していた。憲宗が、藩鎮対策だけでなく、吐蕃対策にも強い関心を抱いていた点については、『資治通鑑』卷二三八、元和五年（八一〇）十二月条に、憲宗の言葉として「今河数州、皆国家政令所不及、河湟数千里、淪於左衽、朕日夜思雪祖宗之恥。」と見える事からも推測される。つまり、河北・河南の反側藩鎮を掌握する事と、吐蕃に占領された河湟（隴右）⁽¹⁸⁾を奪還する事が、憲宗にとって唐王朝を再建するための二大目標であった。

吐蕃は安史の乱の際、唐軍が東方に移動した隙に河西・隴右を占領した。しかし、乱後、弱体化した唐は国内問題を優先せざるを得ず、代宗も徳宗も吐蕃に対しては防衛戦を重んじ、対吐蕃戦は概ね消極的であった。このため、唐は河西・隴右を奪還できずにいた。

そこで、憲宗は失地回復を期し、吐蕃に対し積極的に攻めに転じようとしたのである。その事は『新唐書』卷二二六、吐蕃伝に「憲宗常覽天下図、見河湟旧封、赫然思経略之。」（憲宗は常に天下の地図を見ては河湟の旧領を見て憤り、（吐蕃の占領下にある）河湟の攻略を考えた。）、『旧唐書』卷一三三、李愬伝に「憲宗有意復隴右故地、元和十三年五月、授愬鳳翔隴右節度使。」（憲宗は隴右の旧領を回復したいと考え、元和十三年（八一八）五月、李愬を鳳翔隴右節度使に任命し

た。」とある事からも窺い知る事ができる。

憲宗は、このように吐蕃に対し河西・隴右を奪還するための戦いを挑みたいと志を抱いていたが、即位直後より、劉闢の乱（元和元年）、楊惠琳の乱（元和元年）、王承宗の乱（元和四～五年）などの藩鎮の乱が頻発した【年表1】ため、当面は藩鎮対策に専念せざるを得なかった。このため、治世初期の憲宗には吐蕃と和睦し西北辺の安寧を確立する必要がある、例えば、元和元年（八〇六）、吐蕃人捕虜七十人を釈放し（『冊府元龜』卷四二、帝王部仁慈）、元和四年～元和五年吐蕃との間で会盟のための交渉を行ったと考えられる。

しかし、憲宗時代に唐・吐蕃間で会盟のための交渉が行われた事は、あまり知られていない¹⁹⁾。その理由として考えられる点は、この交渉が会盟締結に至らなかった事、この交渉が『旧唐書』『新唐書』等の基本史料に記されていない事にある。

ただし、憲宗が吐蕃の宰相らに下した勅書を白居易が記し、『白氏文集』に残っているため、唐・吐蕃間でどのような条項が議論されたか、また、なぜこの交渉が会盟締結に至らなかったか、を推測できる。白居易は翰林学士をつとめ、憲宗の勅書を数多く記したのみならず、自らも憲宗に対し度々上奏して藩鎮対策や吐蕃対策を論じた。政府の中枢部で活躍した白居易の文章は『白氏文集』に収められ、憲宗期の唐の国内政策と対外政策を知るための重要な第一次史料と言える。本章では『白氏文集』にも基づきつつ、憲宗の治世初期の藩鎮対策と、元和四年～五年の唐・吐蕃間の会盟のための交渉を検討したいと思う。

まず第一節において憲宗の治世初期に起こった藩鎮の乱を簡単に概観し、次いで第二節で藩鎮の乱の没発前後の唐王朝の動向と外交を取

り上げ、第三節で元和四年～五年に行われた唐・吐蕃間の会盟のための交渉を検討する。そして第四節で、吐蕃との和睦交渉と内乱との関連性について考察する。

第一節 憲宗の治世初期における藩鎮の乱

憲宗の治世はじめ、元和元年～五年（八〇六～八一〇）に勃発した藩鎮の乱や反側藩鎮の動向、唐による反乱討伐の様子を『旧唐書』卷十四、憲宗紀、『資治通鑑』卷二三八等に依拠し、簡単にしておく。

憲宗の即位（八〇五）の翌年となる元和元年（八〇六）には劍南西川節度使の劉闢と夏州兵馬使の楊惠琳、元和二年（八〇七）には鎮海軍節度使の李錡が各々反乱を起こした。即位直後の憲宗の手腕が試されたが、憲宗はこれらの反乱を全て鎮定し、実力を示した。

しかし、憲宗は元和四年～五年（八〇九～八一〇）、成徳節度使・王承宗の討伐に難渋した。王承宗は元和四年三月、父の死後、留後（節度使代理）を自称した。このとき憲宗は藩帥位の世襲を認めず、同年四月、討伐を検討した。だが、成徳は勢力と独立心が強く、魏博・盧龍とも結束が固かった【図1】ため、政府内でも派兵に対し慎重論が唱えられた。そこで憲宗は成徳から二州を削り、勢力削減を試みた上で王承宗を成徳節度使に任じたが、王承宗が反発したため、十月、王承宗の官爵を剥奪し討伐に踏み切った。しかし、王承宗討伐は惨々しい戦果を挙げられなかった上、十一月には淮西節度使の吳少誠が死去し、従弟の吳少陽が少誠の子を殺して留後を自称した。憲宗は河北に派兵中で、淮西を討伐できなかったため、吳少陽の留後就任を認めた（元和五年三月）。だが、王承宗討伐は半年以上経過しても戦

果を得られなかったため、元和五年（八一〇）七月、憲宗は王承宗を許して成徳節度使に任命し、討伐を中止した【年表1】。

第二節 内乱への対応策と外交

以上のように憲宗の治世初期、藩鎮の乱が頻発し、唐廷では、こうした内乱への様々な対応策について議論が重ねられた。筆者がここで注目した点は、その際に吐蕃・ウイグルの動向に対しても大きな注意が払われた事である。かつて、吐蕃は安史の乱の時、河西・隴右を奪取し、長安を十五日間も占拠し、ウイグルは建中四年（七八三）（興元元年（七八四）、反側藩鎮の朱滔と連合して河北を襲撃した。それゆえ、憲宗期の唐政府も、内乱に乗じて吐蕃・ウイグルが侵攻してくる事、あるいは吐蕃・ウイグルが反乱分子と結託する可能性を危惧したのであろう。実際、『資治通鑑』『文苑英華』『全唐文』『白氏文集』等は、内乱への対策と外交について、以下のような意見が憲宗に対して具申された事を伝えている。

・元和元年（八〇六）、劉闢の乱の際、翰林学士の李吉甫は、吐蕃が間諜を放ち唐の内情を探っている事、吐蕃と劉闢が通好している事、唐が西南（四川）に派兵すれば、吐蕃がその虚に乗じ侵攻してくる可能性もある事を指摘した。⁽²⁰⁾

・元和四年（八〇九）七月、憲宗が王承宗の討伐について臣下と議論した際、翰林学士の李絳は、吐蕃やウイグルに乗じる隙を与える危険性があるとの理由で、王承宗への派兵に懸念を表明した。⁽²¹⁾

・元和四年十月より始まった王承宗討伐が半年以上も戦果を挙げられなかったため、元和五年（八一〇）三月、翰林学士の白居易は憲宗

に対し、王承宗討伐を止めるよう進言した。このとき白居易は、吐蕃とウイグルは中国に間諜（細作）を放ち情報を収集し、唐の内情を知悉している事、吐蕃・ウイグルに唐の兵力の強弱や軍事費の多少を知られてはならない事、王承宗討伐に手こずると、吐蕃・ウイグルが虚に乗じ入寇してくる可能性がある事、今の唐の戦力では吐蕃・ウイグルに応戦できない事などを指摘した。⁽²²⁾

このように、藩鎮の乱が勃発する前後、唐の政権中枢部では、吐蕃やウイグルが内乱を好機と見て侵攻してくる危険性があるとの指摘がしばしば見られ、内乱の長期化が外圧を促す契機とならぬよう、警告が発せられた。また、吐蕃とウイグルが間諜を中国に派遣して諜報活動を行っていた事、それを唐政府も察知していた事もわかる。

第三節 元和四年（八一〇）の

唐・吐蕃間の会盟のための交渉

先述の通り、憲宗の治世初期、唐では藩鎮の乱が相次ぎ、政府内でも吐蕃対策が論じられ、内乱に乗じて吐蕃が侵攻する可能性を危惧する意見も見られた。おそらくは唐のこうした内憂が要因となって、憲宗は元和四年（八一〇）五年、吐蕃と会盟のための交渉を行ったと考えられる。

一方、当時の吐蕃は、唐・ウイグル・南詔の対吐蕃包囲網によって苦境に立たされており【図2・A】、貞元十七年（八〇一）には吐蕃軍十万が唐軍に大敗し、兵力の半分を喪失する程の痛手を受けている。⁽²³⁾つまり、吐蕃もまた対外的な孤立や軍事力の弱体化などにより、唐との和睦を必要としていたと思われる。こうして唐・吐蕃双方の外患緩和のための外交方針が一致し、両国は元和四年（八一〇）五年、会盟のため

【年表2】憲宗時代後半（817～820）の吐蕃・ウイグルとの外交、及び、藩鎮対策

年代	吐蕃（唐との和睦交渉、対戦、国内事情等）	ウイグル（唐との交渉等）	唐の国情、唐の藩鎮対策、藩鎮の乱等
元和12 (817)	4月、憲宗が、吐蕃王チデソツツェンの弔問のため、烏重規を弔祭使、段鈞を副使に任命し、吐蕃に派遣。	2月、李誠をウイグルに派遣し、公主降嫁の延期を伝える。	10月、李愬が蔡州に侵攻し呉元済を捕縛。 11月、呉元済が長安で処刑される。 《淮西平定》
元和13 (818)	5月、憲宗が隴右奪還のため李愬を鳳翔隴右節度使に任命。 9月、吐蕃の使者論矩立蔵が来朝。 10月、吐蕃軍が宥州、鳳翔を包圍。靈武の定遠城で唐軍が吐蕃軍2万を撃破。郝玘が2万餘の吐蕃軍を撃破し原州城を回復。田緒が靈武で吐蕃軍3千餘を撃破。 11月、吐蕃軍が河曲を襲撃。唐軍が夏州で吐蕃軍5万を撃破。靈武が、吐蕃の長楽州（安楽州）の羅城を攻め破壊。王播が峨和城・棲鷁城（四川省）等を占領し城塞構築。 《唐・吐蕃間の戦闘開始》	この年、ウイグルが朝貢〔旧15憲宗紀〕。	正月、李師道（平盧節度使）が三州の献上と長男の入侍を申し出る。 2月、程權（横海節度使）が入朝・帰順。 4月、王承宗（成徳節度使）が二州を献上し、息子を人質として長安に送る。劉聰（盧龍節度使）も恭順。 4月、李師道が三州献上を撤回したので、憲宗は李師道討伐を決意。 5月、憲宗が、李愬を鳳翔隴右節度使に任命。 7月、憲宗は、李愬を武寧節度使に任命し、宣武・魏博・義成・武寧・横海等に李師道討伐を命令。《李師道討伐の開始》
元和14 (819)	正月、憲宗が論矩立蔵を帰国させる。 8月、吐蕃軍が慶州に駐屯し、河州に到来。 10月、吐蕃軍約15万が塩州を包圍。塩州刺史の李文悦が塩州を堅守し、靈武牙將の史敬奉も吐蕃軍を背後から攻撃したため、吐蕃軍は約27日間の包圍の後、撤退。 《吐蕃の入寇激化》	正月、ウイグル使節に賜る〔冊976〕。 この頃（元和末）ウイグルの合達干が来朝し公主降嫁を請願。 憲宗はこれを許可。《元和末、憲宗がウイグルへの公主降嫁を許可》	正月、李愬が魚臺を陥落させ、田弘正が東阿、陽穀で淄青軍を破る。 2月、李師道が部下に弑殺され、首級が長安に届けられる。《李師道の乱を平定》
元和15 (820)	正月、憲宗が塩州城の修築を命令。 2月、弔祭使の田洎が吐蕃を訪れ、憲宗の崩御を伝える。（このとき吐蕃が田洎に対し、長武城下で会盟することを要請） 2月、吐蕃軍が靈武に入寇。 3月、吐蕃軍が、青塞堡、塩州に入寇。 7月、吐蕃が遣使し、憲宗の死を弔問。 10月、穆宗が邵同を答吐蕃請和好使となし、吐蕃に派遣。 10月、吐蕃と党項が涇州に入寇。（このとき吐蕃は「田洎が会盟を許したので会盟のために来た」と入寇の理由を説明） 10月、吐蕃が雅州に入寇。王涯が「破吐蕃策」を献言。（ウイグルに金帛を贈って吐蕃を攻撃させるよう提案したが、穆宗は許さず） 11月、吐蕃討伐の勅命を受け、李佑（夏州節度使）が長沢鎮（原州の北）、李聽（靈武節度使）が長楽州に赴く。 12月、吐蕃軍が烏、白池を包圍。 《吐蕃の激しい入寇がつづく》	正月、憲宗が崩御し、穆宗が即位。 3月、穆宗が合達干に対しウイグルへの公主降嫁を許可。穆宗が永安公主（第九妹）の保義可汗への降嫁を決定。 《穆宗がウイグルへの公主降嫁を許可》 10月、王涯が「破吐蕃策」を献言。	正月庚子、憲宗が崩御（宦官による暗殺）。 正月丙午、穆宗が即位。

※略号：旧＝『旧唐書』、冊976＝『冊府元龜』 卷976外臣部褒異3

の交渉を行う事となったのであろう。

元和四年（五年）の交渉の際、憲宗は吐蕃に対し、平涼偽盟の時（貞元三〇七八七）に吐蕃軍が捕縛した唐の捕虜（路泌と鄭叔矩）を返還する事、吐蕃の占領下にある西北辺の三州（安楽州、秦州、原州）を唐に返還して国境を劃定する事、を会盟の条件として提示した。国境や領土に関する問題は、これまでの唐・吐蕃会盟の条項の中で最も重視された決め事であり、とりわけ徳宗時代の建中会盟では、厳密に国境を劃定した。また、捕虜の返還は、建中会盟の際、唐と吐蕃の双方が互いの捕虜を返還し合った事が会盟締結の契機にもなり、盟文にも記された⁽²⁴⁾。憲宗は徳宗に倣い、吐蕃に対し、捕虜返還と国境劃定を提示して、会盟の締結を模索したと思われる。

(a) 捕虜（路泌、鄭叔矩）の返還について

憲宗は、和睦を求める吐蕃に対し、元和四年（八〇九）五月、祠部郎中の徐復を吐蕃に派遣し、平涼偽盟の時（貞元三〇七八七）に吐蕃軍が捕虜とした副元帥判官の路泌と会盟判官の鄭叔矩を返還するよう要請

した(『旧唐書』卷一九六、吐蕃伝、『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二七、元和四年五月条)。

貞元三年(七八七)閏五月、平涼偽盟において唐の使節や将兵が吐蕃軍に捕縛され、ラサに連行されたが、唐政府が吐蕃に対し、正式に捕虜の返還を要請するのは、これが初めてであった。実は、路泌の息子路隨が、父親の解放を願ひ、憲宗に対し吐蕃との和睦を懇願したため、憲宗は路隨の願ひも聞き入れる形で、吐蕃に対して捕虜の返還を求めたのであった(『旧唐書』卷一五九、路隨伝)。

これに対し、吐蕃は元和五年(八一〇)五月、論思邪熱を派遣すると、柩に納めた路泌と鄭叔矩の遺骸を返還するとともに、鄭叔矩の息子、文延ら十三人を帰国させた(『旧唐書』吐蕃伝)。吐蕃側も、唐との会盟締結を期して捕虜の返還に応じたのであろう。また、憲宗が元和元年(八〇六)、吐蕃人捕虜七十人を返還したため、吐蕃側も、その返礼も兼ねて鄭叔矩らを唐に返還したと思われる。

(b) 三州(安楽州、秦州、原州)の返還と国境劃定について

次に、会盟のための、より実際的な条項となる領土の返還と国境の劃定に関して、『白氏文集』に基づきながら確認していく。

『白氏文集』卷三九「與吐蕃宰相鉢闡布勅書」(元和四年冬作)には「所議割還安楽、秦、原等三州事宜、已具前書：必欲復修信誓、即須重畫封疆、雖兩國盟約之言、積年未定、但三州交割之後、剋日可期。〔議題となつてゐる安楽州、秦州、原州等の三州の割讓・返還については前の文書で取り上げた。〕信義のある盟約を再度締結したいなら、国境を劃定し直すべきである。兩國の盟約の文言は長年定まつていないが、吐蕃が三州を唐に割讓後、日時を決め、会盟を締結しよう。」、

『白氏文集』卷三九「與吐蕃宰相尚綺心兒等書」(元和五年七月作)には「若議修盟、即須重定封疆、先還三郡。〔もし会盟の締結を議論するなら、すぐに国境を劃定し直し、吐蕃がまず三郡(安楽州、秦州、原州)を返還すべきである。〕」⁽²⁶⁾とあり、憲宗は、吐蕃による会盟締結の要請に対し、安楽州(寧夏回族自治区靈武)、秦州(甘肅省天水市)、原州(寧夏回族自治区固原市)の三州を唐に返還し、国境を劃定するよう要求した。⁽²⁷⁾

吐蕃側の対応については『旧唐書』吐蕃伝に記載があり、元和五年(八一〇)六月、憲宗が吐蕃の使者と唐の宰相杜佑に議論させたところ、吐蕃の使者は「秦州、原州、安楽州を唐に返還します」と述べた。しかし、三州が唐に実際に返還されたとの記事は『旧唐書』『新唐書』等には見えない。これについて筆者は、吐蕃側は三州を唐に返還しなかったと推測する。その根拠は、元和十三年(八一八)十月、平涼鎮遏兵馬使の郝玼が吐蕃軍二万を撃破し原州城を奪還した事、同年十一月、靈武が吐蕃の長楽州(安楽州)⁽²⁸⁾の羅城を攻め破った事である(『旧唐書』卷十五、憲宗紀、吐蕃伝)。つまり、元和十三年の時点で原州と安楽州は依然として吐蕃の占領下にあり、吐蕃が三州を唐に返還しなかった事が推察できる。憲宗が提示した会盟の条件は三州の返還であったが、実際には吐蕃が唐に三州を返還していないため、憲宗期には唐・吐蕃間で会盟は行われなかったと考えられる。

とはいえ、吐蕃からの朝貢は元和六年(八一二)から元和十年(八一五)まで絶えなかった(『旧唐書』吐蕃伝)。また、元和十三年(八一八)まで唐・吐蕃間に大きな軍事衝突はほとんどなかった【年表1】。会盟のための交渉は不首尾に終わったが、兩國の友好関係に大

きな亀裂が生じる事はなかったようである。

第四節 吐蕃との和睦交渉と内乱との関連性について

以上見てきた憲宗初期の藩鎮の乱と吐蕃対策について、特に元和四（八〇九）～八一〇の唐の国内外の情勢に注目すると、元和四年三月に王承宗が自立し、四月に憲宗が王承宗の討伐を検討し、五月に憲宗が徐復を吐蕃に派遣し和睦交渉を始めている【年表1】。また、王承宗の討伐に関しては政府内でも慎重論が見られ、憲宗も、河北と淮西への二正面作戦を回避するため、やむなく呉少陽の留後就任を容認している。おそらく、憲宗は元和四～五年、王承宗討伐に専念するため、吐蕃との会盟締結を図ったと考えられる。

このように国内情勢が不安定であるにもかかわらず、吐蕃に対し、捕虜の返還、三州の返還、国境の劃定を毅然と要求しており、憲宗の気概が窺える。だが、吐蕃は三州を返還しなかったようであり、交渉の成果は憲宗にとって満足のいくものではなかった。しかし、王承宗討伐も失敗し、内憂が解消されなかったため、憲宗は吐蕃に対し、厳しく対応できなかったのかも知れない。

第三章 開元十三年以降の唐・吐蕃戦—開元十二年の淮西平定との関連性—

憲宗は治世前半には藩鎮対策に専念したが、元和十二年（八一七）、淮西節度使・呉元済の乱を鎮定し、藩鎮対策が一段落すると、元和十三年（八一八）より対吐蕃戦に着手した。本章では、元和十二年の淮

西平定と、元和十三年から始まる対吐蕃戦の関わりに注目し、和平から対戦に転じた唐の吐蕃政策について見ていく。

第一節 淮西平定（元和十二年）と対吐蕃戦の開始（元和十三年）との相関

元和九年～十二年（八一四～八一七）の淮西討伐は唐にとって困難な戦いであったが、元和十二年十月、李愬が淮西節度使の呉元済を捕縛し、ようやく平定した。その後、憲宗は淮西節度使の領域を三分割し、勢力削減につとめた。⁽²⁹⁾ 淮西の平定は唐王朝の威信を大いに高め、安史の乱後、半独立の様相を呈する河朔三鎮などに対しても畏怖の念を抱かせ、元和十三年（八一八）正月～四月、平盧節度使の李師道、成徳節度使の王承宗、盧龍節度使の劉總、横海節度使の程權が、憲宗に対し、息子の入侍や州の献上を申し出、唐王朝に対して恭順の意を示した。しかし、李師道が同年四月、三州と人質の献上を撤回したため、憲宗は七月、宣武・魏博・義成・武寧・横海等に対し、李師道討伐を命令した（『旧唐書』憲宗紀、『新唐書』卷七、憲宗紀、『資治通鑑』卷二四〇、年表2）。

前述の通り、憲宗は吐蕃の占領下から河湟（隴右）を奪還したいと志を抱いていたが、治世前半は藩鎮対策を優先せざるを得ず、吐蕃とは友好関係を保ち外圧の軽減につとめた。しかし、淮西平定の翌年の元和十三年（八一八）十月より、唐軍による吐蕃への波状攻撃が始まっていることから、憲宗が念願の河湟（隴右）奪還戦を始動させた事が推測される。

なお、李天石氏、馬勇氏は、淮西の平定と対吐蕃戦の開始との関連

性を示す事象として、元和十二年（八一七）～十三年（八一八）の將軍李愬の異動を挙げている。⁽³⁰⁾

李愬は、元和十二年十月、淮西節度使の吳元済を捕縛し、淮西の乱を鎮定した名將であった。淮西平定後の李愬については、『旧唐書』

李愬伝に「憲宗有意復隴右故地、元和十三年五月、授愬鳳翔隴右節度使：愬未発、属李師道再叛：乃移愬為徐州刺史、武寧軍節度使。」と見える。つまり、憲宗は隴右奪還を期し、元和十三年五月、李愬を対吐蕃戦の前線司令官となる鳳翔隴右節度使に任命した。しかし、李愬が隴右に出撃する前に、平盧節度使の李師道が叛旗を翻したため、元和十三年（八一八）七月、⁽³¹⁾ 憲宗は李愬を改めて武寧節度使に任じ、河北に派遣した【年表2】。

このように、淮西平定後、西方の隴右奪還戦と東方の李師道討伐が重要な戦いとなったが、藩鎮対策がやはり優先課題であったため、憲宗は、名將の李愬を対吐蕃戦ではなく李師道討伐に派遣したのである。そして、主要な戦力を李師道討伐に投入した甲斐もあって、元和十四年（八一八）二月、唐は李師道の乱を鎮圧した【年表2】。

第二節 元和十三年（八一八）以降、唐・吐蕃間の戦闘激化

元和十三年七月、李師道討伐のために、李愬を初めとする唐の主戦力が東方戦線に投入されたが、それによって対吐蕃戦が唐側に著しく不利となったわけではなく、西北辺の前線の武將らが吐蕃軍との戦いで善戦した。まず、『旧唐書』憲宗紀、吐蕃伝、『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二四〇、卷二四一などから、元和十三年～十四年（八

一八～八一八）の唐・吐蕃間の対戦をまとめると、以下のようになる。

元和十三年十月、吐蕃軍が宥州、鳳翔を包囲した。一方、同じ元和十三年十月、靈武の定遠城で、唐軍が吐蕃軍二万を撃破した。また、平涼鎮遏使の郝玼が、二万餘の吐蕃軍を撃破し、原州城を回復した。

更に、夏州節度使の田緝が、靈武で再度吐蕃軍三千餘を撃破した。同年十一月には、吐蕃軍が河曲を攻撃した。同じ十一月、唐軍は夏州で吐蕃軍五万を撃破し、靈武が吐蕃の長楽州（安楽州）の羅城を攻撃し破壊した。また、劍南西川節度使の王播が、峨和城と棲鷄城（ともに四川省）等を占領し、城塞を築いた。

元和十四年（八一八）八月、吐蕃軍は慶州に駐屯し、河州に到来した。また、同年十月には、吐蕃の節度使論三摩、宰相の論塔藏、中書令の尚綺心兒が、約十五万の軍勢を率い、塩州を攻撃した。このとき党項も吐蕃軍に加勢した。吐蕃軍は圧倒的な戦力で幾重にも塩州を包囲し、攻城機も投入して城壁を破碎したが、塩州刺史の李文悦が塩州を堅守したため、吐蕃側も苦戦した。更に、靈武牙將の史敬奉が吐蕃軍を背後から攻撃したため、吐蕃軍は、約二十七日に及ぶ攻撃の後、塩州の包囲を解いて撤退した【年表2】。

以上が唐・吐蕃間の戦いの経緯である。なお、『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝によれば、元和十三年十月に吐蕃が先に戦いを仕掛けたように記されている。吐蕃は間諜を派遣し唐の内情を探っており、憲宗が隴右奪回戦を始める事を察知していたと思われる。また、戦場となった諸市は唐と吐蕃の国境地帯にあるため、吐蕃も唐側の侵攻を予期し、あらかじめ出動態勢を整え、唐よりも先んじて攻撃を開始したと考えられる。

この戦いで唐側は数都市を吐蕃から奪還したものの、隴右全土の奪回には至らなかった。⁽³²⁾のみならず、元和十三年以降、吐蕃軍の入寇が激しくなった【年表2】。それゆえ、憲宗はウイグルに公主を降嫁させ、対吐蕃で連繫する事を模索するようになる。次章では、唐の吐蕃対策にも留意しつつ、ウイグルへの公主降嫁の問題を検討する。

第四章 憲宗時代におけるウイグルへの公主降嫁問題

和蕃公主の降嫁⁽³³⁾は、特に安史の乱後、弱体化した唐にとってウイグルとの親善関係を維持するための重要な外交政策となり、肅宗は娘の寧国公主、代宗は養女の崇徽公主（僕固懷恩の娘）、徳宗は娘の咸安公主を各々可汗に嫁がせ、外圧の緩和につとめた。

しかし、憲宗は、咸安公主の死去（元和三〇八〇）後、保義可汗が友好関係の維持を求めて新たな公主の降嫁をしばしば請願したにもかかわらず、治世末期の元和末（八二〇年頃）まで、ウイグルへの公主降嫁を許可しなかった（『旧唐書』卷一九五、迴紇伝）。

憲宗がウイグルに公主降嫁を許さなかった理由について、『新唐書』卷二二七、回鶻伝には「回鶻之請昏、有司度費当五百萬、帝方内討彊節度、故不可」、『旧唐書』卷一六五、殷侗伝には「迴紇請和親、朝廷計費五百萬緡。朝廷方用兵伐叛、費用百端」とある。つまり、降嫁のためには五百万緡という巨額の資装費が必要であったが、このとき唐は内乱鎮圧のため出兵しており、軍事費など様々な事に消費を強いられていた。このため高額の資装費を捻出する余裕がなく、憲宗はウイグルへの公主降嫁を認めなかったのである。

筆者は、ウイグルへの公主降嫁が吐蕃牽制という意義も持つ点に注目し、憲宗期の公主降嫁問題を検討したいと思う。筆者が吐蕃の動向を考慮する理由は二つある。第一の理由は、『旧唐書』迴紇伝に「至元和末……憲宗以北虜有勳勞於王室、又西戎比歲為辺患、遂許以妻之。」とあり、「吐蕃が近年辺境地帯を襲撃するため、憲宗はウイグルへの公主降嫁を許可した」と見えるからである。また第二の理由は、第一章で見たように咸安公主が吐蕃牽制のためにウイグルに降嫁した事にある【図2・A】。憲宗が吐蕃牽制のためにウイグルとの友好関係を重視するなら、咸安公主の死後（元和三〇八〇）、すぐに新しい公主を降嫁させ、ウイグルとの親善強化を試みるはずであろう。しかし、元和末（八二〇年頃）まで約十年間、憲宗はウイグル側の度重なる要請も拒否し、公主降嫁を認めなかった。その背景には、唐と吐蕃の関係が切迫したものでなかった事も考えられる。ゆえに、本章では吐蕃の動向にも留意しながらウイグルへの公主降嫁の問題を確認していく。

元和末に憲宗が公主降嫁を許可するまでの間に、ウイグルからは公主の降嫁を求める使者が二度来朝し（元和八年（八一三）の伊難珠の来朝と、元和末の合達干の来朝）、唐も元和十二年（八一七）に李誠をウイグルに派遣し、降嫁の延期を伝えている。本章では、第一節で伊難珠の来朝、第二節で李誠のウイグルへの派遣、第三節で合達干の来朝を各々取り上げ、公主降嫁を巡る唐・ウイグル間の外交交渉を、吐蕃の動向や藩鎮の乱とも関連させ考察する。

第一節 元和八年（八一三）の伊難珠の来朝

元和八年、保義可汗は伊難珠を憲宗のもとに派遣し、公主降嫁を請願した。だが、憲宗が返答しなかったため、保義可汗は三千の騎兵を率いて鵬鵜泉（西受降城の北三百里）に至った。このため唐の振武軍は黒山に駐屯し、天徳城ではウイグル軍への防備を固め厳戒態勢を敷いた（『旧唐書』迴紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』卷三二九）。しかし、可汗の襲来が唐・ウイグル間の大きな衝突に発展する事はなかった。また、ウイグルは元和九年（八一四）以降も朝貢と互市を続けており、可汗の襲来を機に、その後の唐とウイグルの関係が悪化する事もなかった【年表1】。それゆえ元和八年の保義可汗の襲来は、公主降嫁を認めない憲宗に対し、降嫁を促すための威嚇行為であったとも見なせよう。

このとき、礼部尚書の李絳は憲宗に対し、ウイグルに公主を降嫁させるべきであると主張し、降嫁の利点として以下の三点をあげた。①ウイグルの入寇がなくなるので城塞と兵力の強化が可能である事、②北方を警戒する必要があるため、淮西征伐に兵力を集中できる事、③ウイグルとの和睦により吐蕃を牽制できるため、吐蕃の入寇を阻止できる事、の三点である。そして李絳は、降嫁のための費用は江淮の大縣からの賦税二十万緡で賄えると述べ、懸念される資装金問題についても解決案を示したが、憲宗は公主降嫁を許さなかった。

憲宗が公主降嫁を認めなかった要因として、資装金以外に考えられる事は、吐蕃との関係であろう。吐蕃は前述のように元和十年（八一五）まで朝貢を続け、入寇もほとんどなかったため、元和八年～九年

の時点では唐と吐蕃の関係は良好であった。つまり、李絳も指摘する「吐蕃牽制のためのウイグルへの公主降嫁」という重要性が薄らいでいた点も、憲宗がウイグルへの公主降嫁を許さなかった理由であろう。

第二節 元和十二年（八一七）、李誠のウイグルへの派遣と降嫁延期の要請

憲宗は、元和十二年二月、入廻鶻使の李誠と副使の殷侑をウイグルに派遣し、「公主降嫁を延期したい」と伝えた。³⁸⁾当時の唐は、淮西の呉元済と河北の王承宗に各々討伐軍を派遣し、巨額の軍事費を要していたため、やはり莫大な資装金の捻出は困難であった【年表1、年表2】。それゆえ、憲宗は保義可汗に対し、公主降嫁の延期を請願したのである。

また、この頃の唐・吐蕃関係も良好であった。吐蕃は元和六年～十年（八一～八一五）、朝貢を欠かさず、元和十年（八一五）、吐蕃王チデソンツェンが死去した際、憲宗も、烏重元を弔祭使、段鈞を副使に各々任命して吐蕃に派遣し、吐蕃王の死を悼んだ³⁹⁾（元和十二年四月）。つまり、唐は依然として吐蕃と友好関係を築いており、対吐蕃連合のために、あえてウイグルと和親を強化する必要がなかった。このため、憲宗は保義可汗への公主降嫁を認めなかったためであろう。降嫁の延期を伝えた理由は、可汗の気持ちに損なわないための配慮だったと思われる。

一方、ウイグル側の事情は、唐よりも深刻であった。実際、この時期、ウイグルは吐蕃と交戦しており、元和十一年（八一六）には吐蕃軍がウイグルの拠点に迫る勢いであった。即ち、『旧唐書』吐蕃伝に

【年表3】穆宗時代（821～822）の吐蕃との長慶会盟、ウイグルへの太和公主降嫁、藩鎮の乱

年代	吐蕃（唐との和睦交渉、及び対戦）	ウイグル（唐との交渉）	唐の国情、唐の藩鎮対策、藩鎮の乱など
長慶元 (821)	6月、吐蕃が唐とウイグルの通婚を聞き青塞堡を襲撃。塩州刺史の李文悦がこれを撃退。 9月、吐蕃が論訥羅を派遣し、唐に会盟締結を請願すると、 穆宗は吐蕃との会盟を許可 。 9月、穆宗が劉元鼎を西蕃盟会使に任命。 10月10日、長安で唐の宰相らと吐蕃の使者論訥羅が会盟。 《長慶会盟：於長安》 10月、李進誠（靈武節度使）と吐蕃軍が大石山で対戦。	2月、保義可汗が死去。 4月、穆宗が新可汗を登羅羽録没密施句主録毗伽可汗（＝崇德可汗）に冊立。 5月、ウイグル使節が公主を迎えに來たため、穆宗は妹の太和長公主をウイグルに嫁がせる事を決定。 6月、吐蕃が唐とウイグルの通婚を聞き青塞堡を襲撃するが、塩州刺史の李文悦がこれを撃退。 ウイグルは「1万騎を北庭から、1万騎を安西から各々出撃させ、吐蕃軍を阻止しながら公主をウイグルに連れ帰る」と上奏。 7月、太和公主が長安を出発しウイグルに降嫁。 《太和公主のウイグルへの降嫁》	7月10日、 幽州で反乱勃発 ：幽州兵が、幽州盧龍軍節度使の張弘靖を捕え、朱克融（幽州都知兵馬使）を留後に推戴。 7月28日、 成徳で反乱勃発 ：王廷湊（成徳都知兵馬使）が、成徳節度使の田弘正を殺害。 8月、瀛州で反乱勃発：觀察使の盧士玫が捕えられ幽州に送られる。王廷湊が深州を包囲。 9月、相州で反乱勃発：相州刺史の邢楚が殺される。朱克融が易州を襲撃。 10月、朱克融が蔚州を攻撃。王廷湊が貝州を攻撃。 11月、朱克融が定州を攻撃。淄青の將馬延瑩が反乱を起こしたので、薛平（平盧節度使）がこれを撃破。 12月、穆宗は朱克融を許して幽州節度使に任命し、王廷湊の討伐に専念。
長慶2 (822)	4月24日、劉元鼎がラサに到着。 5月6日、ラサで唐と吐蕃が会盟。 《長慶会盟：於ラサ》 6月、吐蕃軍が靈武と塩州に入寇。 8月、劉元鼎が吐蕃から帰国。	この頃、ウイグルが唐の河北平定戦に加勢するため3千の援軍を派遣。 2月、ウイグルに馬の代価として絹5万匹を下賜。 3月、ウイグルに再度馬の代価として絹7万匹を下賜。豊州にいたウイグルの援軍（李義節が統率）が帰国。 閏10月、胡証らが長安に帰還。	正月、 魏博で反乱勃発 ：田布（魏博節度使）が王廷湊討伐に赴くが、史憲誠（先鋒兵馬使）に迫られ自殺。穆宗は、留後を自称する史憲誠を許し、魏博節度使に任命。 2月、穆宗が王廷湊を成徳節度使に任命。 3月、崔群（武寧節度使）が副使の王智興に追放されるが、穆宗は智興を武寧節度使に任命。

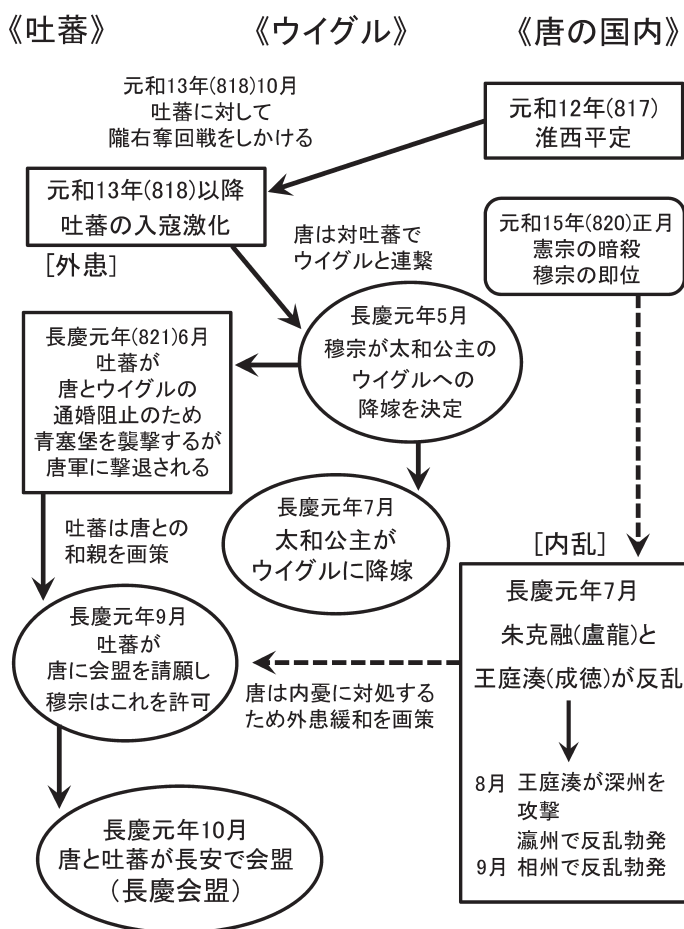
は、吐蕃の都元帥・尚綺心兒が、長慶二年（八二二）に、「迴紇小国也。我以丙申年踰磧討逐，去其城郭二日程，計到即破滅矣。會我聞本国有喪而還。（ウイグルは小国だ。私は丙申の年（＝元和十一年丙申）、砂漠を越えてウイグルを追撃し、その城郭を去ること二日の距離まで迫った。私が城郭に到達していれば、ウイグルは破滅したに違いない。しかし、このとき私は本国の喪（チデソンツェン王の死）を聞き、帰国した。」と発言した事が記されている。

この発言は幾分誇張かも知れないが、ウイグルは、吐蕃との対立に強い危機感を抱き、唐との連繫強化を図った可能性も考えられる。つまり、ウイグルが公主降嫁を強く希望した背景には、巨額の資装金の獲得という思惑もあったであろうが、唐と連繫して吐蕃を牽制するという外交戦略もあったと思われる。

第三節 元和末、合達干の来朝と憲宗による公主降嫁の許可

元和年間の末（八二〇年頃）、憲宗がウイグルに対し、公主の降嫁を許可した。前記の『旧唐書』迴紇伝には、憲宗が公主降嫁を認めた理由の一つに「西戎比歳為辺患（吐蕃が近頃辺境地帯を襲撃する）」と記されるが、これは元和十三年（八一八）十月以降の吐蕃軍による入寇を指すと思われる。憲宗は激化する吐蕃の入寇に対抗するため、それまで頑なに拒絶していたウイグルへの公主降嫁を決断したのである【年表2、図4】。

憲宗は、こうして吐蕃牽制のためにウイグルへの公主降嫁を認めたが、元和十五年（八二〇）正月、憲宗が崩御したため、息子の穆宗が、



※黒矢印は比較的確な関連、点線矢印は推測、
楕円形は和親、四角は対戦・対立を示す

【図4】長慶会盟締結に至るまでの唐・吐蕃・ウイグル・藩鎮の動向

ウイグルへの降嫁政策を継承する。

憲宗から穆宗に代替わりした時期（元和十五年）の公主降嫁に関する記述は、『旧唐書』迴紇伝、『資治通鑑』卷二四一、元和十五年条、『唐会要』卷九八、迴紇伝に、以下のように明記されている。元和末、ウイグルの使者合達干が来朝し、通婚を請願したため、憲宗は合達干に対し公主降嫁を許した。だが、元和十五年正月、憲宗が崩御したため、穆宗が同年三月、合達干を引見し、ウイグルへの公主降嫁を許し、合達干を帰国させた。穆宗は同じ三月、第九妹を永安長公主に封じ、

保義可汗に降嫁させる事とした。

なお、皇帝が代替わりしてもウイグルへの公主降嫁の方針が変わらず、後述のように、無理をしても実行している点は、特筆すべき事である。即ち、唐を取り巻く諸情勢により、ウイグルへの公主降嫁が、もはや、皇帝個人というよりも、唐の国家政策として位置付けられていた事を端的に示すものであろう。公主降嫁は、長慶元年（八二一）、太和公主のウイグルへの輿入れによって実現するが、それについては章を改め、吐蕃の動向とも関連させながら見ていきたいと思う。

第五章 ウイグルへの太和公主の降嫁、

吐蕃との長慶会盟の締結

本章では、九世紀前半の外交の大きな転換点とも言える長慶元年（八二一）～八二二のウイグルへの太和公主の降嫁と、吐蕃との長慶会盟の締結について、唐国内の藩鎮対策との相関にも着目しつつ、時系列に沿って見ていく。

第一節 元和十五年（八二〇）十月、

ウイグルを利用した吐蕃への
対抗策としての「破吐蕃策」
の建言

穆宗時代になっても吐蕃による激しい入寇は続き、吐蕃軍は、元和十五年（八二〇）二

月に靈武、三月に青塞堡と塩州、十月には涇州と雅州を各々攻撃した【年表2】。このため、元和十五年（八二〇）十月、劍南東川節度使の王涯は「破吐蕃策」を献言し、ウイグルに金帛を贈って吐蕃を攻撃させるよう提案した。ただし、穆宗はこれを許さなかった（『旧唐書』卷十六、穆宗紀、元和十五年十月条、『旧唐書』卷一六九、王涯伝）。

なお、穆宗は元和十五年三月、ウイグルに対し公主降嫁を認めたので、金帛を贈らなくても、ウイグルとの親睦によって吐蕃を牽制できると判断したのである。あるいは、安史の乱の時、ウイグルの援軍が長安奪回の功績を誇り横暴に振る舞った事に鑑み、穆宗はウイグルの軍事力を利用する「破吐蕃策」はリスクが高いと判断し、採用しなかったのかも知れない。⁽⁴¹⁾しかし、吐蕃に対してウイグルの兵力を直接ぶつけて打撃を与えるという戦略が、当時、唐の政府で持ち上がっていた点は興味深い。

第二節 長慶元年（八二二）七月、ウイグルへの 太和公主の降嫁と吐蕃による妨害

長慶元年（八二二）五月、ウイグルの使節（都督、宰相ら五百餘人）が公主を迎えに來た。このため、穆宗は第十妹を太和公主に封じ、ウイグルに降嫁させる事とした【年表3】。

前章で述べた通り、穆宗は元和十五年（八二〇）三月、永安公主を保義可汗に降嫁させる事に決めた。だが、長慶元年二月に保義可汗が死去し、その後、新たに崇徳可汗が即位したため、穆宗は、崇徳可汗に⁽⁴²⁾対し、改めて太和公主を降嫁させる事にしたのである。

このあたりを少し詳述すると、実際に公主が降嫁するまでの間に、

唐皇帝は憲宗から穆宗に代替わりしている。また、ウイグル可汗も保義可汗から崇徳可汗に代替わりし、公主も永安公主から太和公主に代った。しかも、憲宗は宦官に弑殺されており（『旧唐書』憲宗紀）、唐は、帝権が揺らぐほどの困難に直面しながらも、ウイグルへの降嫁政策を継続させ、実現させた。

唐とウイグルの親善強化は、当然の事ながら吐蕃を刺激し、例えば、唐とウイグルの通婚を阻止するため、吐蕃軍が長慶元年六月、青塞堡を襲撃した【年表3、図4】。これに対し、塩州刺史の李文悦が吐蕃軍を撃退したため事なきを得た（『旧唐書』吐蕃伝、迴紇伝、『資治通鑑』卷二四一、図4）。

しかし、太和公主がウイグルに輿入れる際、吐蕃の攻撃が予想されたため、ウイグルは「一万騎を北庭から、一万騎を安西から各々出撃させ、吐蕃の妨害を阻止しながら公主を連れ帰りたい」と上奏した。また、太和公主は長慶元年七月、長安を出発しウイグルに向かったが、その際、豊州刺史の李祐より「太和公主を迎えるウイグルの三千人が柳泉の畔に陣地を築き、吐蕃の妨害を防いでいる」との上奏もあり、太和公主の降嫁時、ウイグルと吐蕃の間で攻防戦が展開された。その後、太和公主は無事にウイグルに到着し、長慶二年（八二二）閏十一月、公主を送り届けた使者の胡証らが長安に帰還し、穆宗に帰朝報告した（『旧唐書』穆宗紀、迴紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』卷二四一、卷二四二）。

このように、唐の太和公主のウイグルへの降嫁の際には、吐蕃が軍事力をもって妨害したが、それを唐とウイグルが共同で撃退し、唐・ウイグル連合と吐蕃が対立するという構図が、より鮮明な形で浮き彫

りにされた。最後に、この公主降嫁が、皇帝と可汗がそれぞれ代替わりし、公主も代え、更に吐蕃も妨害する緊迫した状況下で強行に実施された点を、もう一度、強調しておく。唐が、無理を押してでもウイグルと結ぼうとした背景には、この時期の唐の張りつめた対外情勢と内治の脆弱性を垣間見る事ができるかも知れない。

第三節 長慶元年（八二一）七月、盧龍（幽州）及び成徳での反乱勃発

次に、この頃の唐の国内情勢を見てみよう。憲宗の治世後半、藩鎮抑圧策によって、半独立的な河朔三鎮・平盧節度使・淮西節度使に対する唐王朝の支配は安定したかに見えたが、その実相は表層的なものに過ぎず、⁽⁴³⁾憲宗崩御の翌年（長慶元＝八二一）、盧龍（幽州）と成徳で相次いで反乱が勃発した。盧龍（幽州）と成徳で起こった反乱の様子を『旧唐書』卷十六、穆宗紀、『資治通鑑』卷二四二等よりまとめると、以下ようになる。

穆宗が、文官の張弘靖を幽州盧龍軍節度使に任命すると、長慶元年（八二一）七月、幽州兵が反乱を起こし、張弘靖を捕え、幽州都知兵馬使の朱克融（朱滔の孫）を留後に推戴した。また、同じ七月、成徳都知兵馬使の王廷湊（王庭湊）が、新任の成徳節度使田弘正を殺害し、叛旗を翻した。田弘正は淮西平定にも貢献し、唐も大きな信頼を寄せていたため、その死は唐王朝に衝撃をもたらした。その後、盧龍（幽州）・成徳の反乱は拡大し、八月、王廷湊が深州を攻撃し、瀛州でも兵乱が勃発して觀察使の盧士玫が捕えられた。更に、九月には相州でも兵乱が起こり、相州刺史の邢楚が殺害された【年表3、図4】。こ

のように、唐は対外的なウイグルとの和平とは裏腹に、度重なる内乱に疲弊していたのである。

第四節 長慶元年（八二一）十月、長安での唐・吐蕃会盟（長慶会盟）

吐蕃の入寇は長慶元年に入ってから続いたが、唐はこれをいずれも撃退した【年表3】。また、前述のように吐蕃は唐とウイグルの連繫強化を阻止せんと幾度か武力行使に及んだが、これも唐とウイグルによって撃退された。このため、吐蕃は孤立への恐怖も手伝って、一転して唐との和睦へと傾いていく。

長慶元年（八二一）九月、吐蕃は論訥羅を派遣し、穆宗に会盟の締結を請願した。⁽⁴⁴⁾これに対し、穆宗は吐蕃との会盟を許可し、九月庚戌、劉元鼎を西蕃盟会使に任命してラサに派遣する事とした。また、長慶元年十月十日、長安において、唐の宰相らと吐蕃の論訥羅が会盟を行った（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。

吐蕃が会盟締結を請願した時、穆宗はすぐにこれに応じているが、その背景には、長慶元年七月、河北で勃発した朱克融の乱と王廷湊の乱、その後の反乱の拡大が、大きな影を落としていたと考えられる【年表3、図4】。つまり、唐は深刻化する内憂に強い危機感を抱き、吐蕃との和睦により外患の緩和を図ったと推測される。唐は、ウイグルと親善強化し、外交で成功を収めたものの、内治に失敗し内乱を悪化させたため、再び外交によって吐蕃と関係改善し、態勢を立て直そうとしたのであろう。

第五節 長慶元年（八二一）末～長慶二年（八二

二）河北等における藩鎮の乱

一方、河北の情勢は長慶元年十月以降も不穏であり、長慶元年十月、朱克融が蔚州、王廷湊が貝州を各々攻撃し、十一月には朱克融が定州を攻撃した。このため、穆宗は長慶元年十二月、朱克融を許して幽州盧龍軍節度使に任命し、王廷湊の討伐に戦力を集中する事とした。これにより唐政府は兵力分散の危険を回避したのであるが、河北における騒乱は収まるどころか、より一層激化した。長慶二年（八二二）正月、王廷湊討伐に赴いた魏博節度使の田布が、先鋒兵馬使の史憲誠に迫られ、自殺した。史憲誠は、その後、留後を自称したが、穆宗はこれを承認したのみならず、後には史憲誠を魏博節度使に任命し、史憲誠と、その麾下にいる魏博將兵の懷柔を図った。また、王廷湊による深州包囲が深刻化したため、長慶二年二月、穆宗はやむを得ず、王廷湊を成徳節度使に任命し、事態の鎮静化を図った。しかし、唐朝の弱腰は更なる離反を促し、長慶二年三月、武寧節度使の崔群が、副使の王智興に追放された。穆宗はこれに対しても断固たる対応ができず、王智興を武寧節度使に任じ、懷柔を試みた（『旧唐書』穆宗紀、『資治通鑑』卷二四二）。

このように、長慶元年七月、盧龍（幽州）と成徳で勃発した反乱を機に兵乱が頻発し、唐はいずれの鎮庄にも失敗した。

第六節 長慶二年（八二二）五月、ラサでの唐・

吐蕃会盟（長慶会盟）

以上のような国際情勢と国内動向のもと、唐・吐蕃間での長慶会盟は、長慶元年十月、まず長安において行われ、次いで、翌年の長慶二年（八二二）、吐蕃の都ラサでもなされた。ラサの会盟には西蕃盟会使の劉元鼎が派遣され、長慶二年五月六日、劉元鼎が吐蕃の宰相らとの間で会盟を締結した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。

長慶会盟は、七世紀後半から約一世紀半にわたり激しい攻防戦を繰り返してきた唐・吐蕃間に、最終的な和平をもたらしたという意味で、東部ユーラシア史上、画期的な外交成果と位置づけられるが、それは多様な要因が絡まって成立に至った。

吐蕃側から見ると、元和十三年（八一八）以降、唐への入寇を繰り返したが、思うような戦果を得られなかった上に、唐とウイグルの連繫も強化されるなど、外交的失敗による孤立への恐怖も一因となり、唐との和平を決断した。

一方、唐は、ウイグルとの親睦を強化し、吐蕃を孤立させる事で外交的に勝利したが、国内では、元来独立心の強い河朔三鎮が相次いで叛旗を翻し、穆宗はこれを鎮圧する事ができず、内乱は次第に拡大した。度重なる内乱に苦戦した唐は、内政の失敗を外交で補う意味でも吐蕃との会盟に踏み切り、外圧の軽減を模索したと思われる。

おわりに

最後に、本稿で見た九世紀前半の唐・吐蕃・ウイグルの外交関係に

ついて総括し、その後の東部ユーラシアの動向をまとめて本稿を終えたいと思う。

憲宗の治世初期には、藩鎮の乱が頻発したため、唐は吐蕃と会盟のための交渉を行うなど、吐蕃との親善関係の維持を試みたが、淮西を平定し、反側藩鎮を概ね掌握すると、隴右奪還のため対吐蕃戦を開始した。

しかし、これ以降、吐蕃の入寇が激化したため、唐は吐蕃の牽制を図り、それまで認めなかったウイグルへの公主降嫁を許可し、太和公主をウイグルに降嫁させた。ウイグルへの公主降嫁に関しては、唐皇帝が暗殺されるという形で代替わりし、ウイグルの可汗も代替わりし、公主も代え、紆余曲折を経つつも、唐は継続的かつ政策的にこれを実現した。

このような唐・ウイグル間の連繫強化は、吐蕃にとって脅威であり、婚姻妨害なども行ったが、それはかえって唐とウイグルの結びつきを強化させ、孤立を深めた吐蕃は、遂には唐との和睦を望んだ。このとき頻発する藩鎮の乱に困窮していた唐は、これに応じ、唐と吐蕃は最終的な和親となる長慶会盟を結ぶ【図4】。

このように、ウイグルへの太和公主の降嫁と、吐蕃との長慶会盟の締結は、唐の国内情勢と東部ユーラシアの諸国間の勢力関係が、絡み合って実現に至ったと言える。

なお、吐蕃は、唐と長慶会盟を締結したのと同じ時期、唐に内密でウイグル、南詔とも個別に会盟（四国会盟）を締結し【図2・B】、唐がそれまで構築していたウイグル・南詔との連繫による「吐蕃包囲網」【図2・A】を切り崩した。ただし、唐による対吐蕃包囲網が、

唐・ウイグル・南詔の連繫によって吐蕃を孤立させるための外交戦略であった事とは異なり、吐蕃が主導で締結した「四国会盟」は、吐蕃・ウイグル・南詔が反唐で連合したわけではない。また、唐も太和公主の降嫁によりウイグルとも和親を深めており【図2・C、図4】、長慶元年（八二二）以降も、唐が対外的に孤立を深め、窮地に陥ったわけでもない。

唐・ウイグル間で行われた太和公主の降嫁、唐・吐蕃間の長慶会盟の締結、そして、吐蕃主導によって唐・吐蕃・ウイグル・南詔間で「四国会盟」が締結されてより以降、唐・吐蕃・ウイグルの間に大きな軍事衝突はなくなり、表面上は、東部ユーラシア世界は協調的な国際関係を築いた形となった【図2・C】。

このように、唐は吐蕃、及びウイグルとの和平を実現したが、国内では河朔三鎮が唐王朝の羈絆を脱し、以後、唐の統制下に服する事はなかった。そして、唐は反側藩鎮を国内に抱えたまま、その後、一世紀近く存続し、朱全忠の乱により、九〇七年、滅亡に至る。

また、吐蕃は八四〇年代、内訌が原因で衰退し、ウイグルは八四〇年、キルギスの襲撃を受けて滅亡した。長慶会盟、四国会盟から、およそ二十年後の出来事である。唐が内憂に呻吟したように、吐蕃とウイグルも、実は内憂に苦慮し、会盟締結や公主降嫁によって、国力の回復を図ろうとしたのかも知れない。吐蕃、ウイグルの国内情勢にも焦点を当てて、八二〇年代の外交を見直す事も今度の課題の一つであろう。

註

- (1) 例えば、漢文史料を主に用いて東部ユーラシアの国際情勢を論じたものは、菅沼愛語、菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き」(『史窓』第六六号、二〇〇九年二月)、拙著『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移―唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』(溪水社、二〇一三年十二月)、それとは相補的に周縁部から東部ユーラシアを論じたものとしては、森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(関西大学出版部、二〇一〇年三月)、また、日本史の立場から東部ユーラシアという視点で東アジア世界の再構築を試みたものとしては、廣瀬憲雄『倭国・日本史と東部ユーラシア―六・十三世紀における政治的連関再考』(『歴史学研究』第八七二、二〇一〇年十月)、鈴木靖民『倭国史の展開と東アジア』(岩波書店、二〇一二年二月) などがある。
- (2) 前掲註(1) 拙稿「二〇〇九」、拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」(『史窓』第六七号、二〇一〇年二月)、前掲註(1) 拙著「二〇一三」など。
- (3) 拙稿「徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟(建中会盟・奉天盟書・平涼偽盟)―安史の乱後の内治のための外交」(『史窓』第六八号、二〇一一年二月)、拙稿「安史の乱における周辺諸国の動向」(『史窓』第六九号、二〇一二年二月)、前掲註(1) 拙著「二〇一三」第6章、第7章。
- (4) 前掲註(3) 拙稿「二〇一三」、前掲註(1) 拙著「二〇一三」第7章。
- (5) 拙稿「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義―安史の乱以前の二度の会盟を中心に」(『日本西蔵学会々報』第五六号、二〇一〇年七月)、前掲註(1) 拙著「二〇一三」、拙稿「約一〇回の唐・吐蕃会盟(七〇六―八二一年)の様相―唐から見た吐蕃との外交交渉」(『日本西蔵学会々報』第六一号、二〇一五年十一月)。
- (6) 李天石「論唐憲宗元和年間唐朝与吐蕃的關係」(『西蔵研究』二〇〇一年第二期)、馬勇「論唐憲宗、穆宗時期的唐蕃關係」(『雲南民族大学学報(哲学社会科学版)』第二六卷第三期、二〇〇九年)。
- (7) 山口瑞鳳「吐蕃支配時代」(『講座敦煌2・敦煌の歴史』大東出版社、一九八〇年) 二二二頁、山口瑞鳳「沙州漢人による吐蕃二軍団の成立とKhar tan軍団の位置」(『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第四号、一九八〇年) 二八頁、三四頁、森安孝夫「中央アジア史の中のチベット―吐蕃の世界史的位置付けに向けての展望」(『チベットの言語と文化』冬樹社、一九八七年) 五七頁、六七頁註二〇、森安孝夫『シルクロードと唐帝国』(講談社、二〇〇七年) 三五〇―三五二頁。
- (8) 岩尾一史「古代チベット帝国の外交と「三国会盟」の成立」(『東洋史研究』第七二巻第四号、二〇一四年三月。以下、前掲註(8)) 岩尾一史「二〇一四」と略す)、岩尾一史「再論「吐蕃論董勃蔵修伽藍功德記」―羽六八九の分析を中心に」(『敦煌写本研究年報』第八号、二〇一四年三月)。
- (9) 『旧唐書』迴紇伝、『新唐書』回鶻伝。森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」(『内陸アジア言語の研究』第一七号、二〇〇二年九月、『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、二〇一五年二月に再録)、前掲註(7) 森安孝夫「二〇〇七」。
- (10) 『文苑英華』卷六一五、もしくは『全唐文』卷六二六の「代李侍郎論兵表」に「吐蕃…窺伺在心、間諜往来、急於郵伝。又必持兩端之計、與劉闢交通。若聞發兵西南、多取辺鎮、秋風即至、虜馬已肥、冒隙乘虚、必有侵軼。」とある。また『冊府元龜』卷三五九、將帥部立功十二、高崇文に「(劉)闢大懼…西走吐蕃。吐蕃素受其賂、具將啓之。」とある。劉闢の乱、劉闢の吐蕃への逃走については『資治通鑑』卷三三七、元和元年条を参照。
- (11) 前掲註(3) 拙稿「二〇一二」二頁、前掲註(1) 拙著「二〇一三」二二四頁。
- (12) 詳細は、前掲註(3) 拙稿「二〇一二」、前掲註(1) 拙著「二〇一三」第7章。
- (13) 森安孝夫「ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」(『東洋学報』第五五巻第四号、一九七三年三月)。森安孝

- 夫「増補…ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」(『アジア文化史論叢』3、山川出版社、一九七九年、前掲註(9) 森安孝夫「二〇一五」に再録)、前掲註(7) 森安孝夫「二〇〇七」。
- (14) 『資治通鑑』卷二二三によれば、ウイグルは唐に対し、臣と称する事、徳宗の子となる事、使者の数は二百人を越えない事、馬の数は千頭を越えない事、中国人とソグド商人を連れ帰らない事の五カ条を約した。前掲註(5) 拙稿「二〇一五」五六頁も参照。また、咸安公主の降嫁時、可汗は徳宗に対し「吐蕃が唐に災いをもたらすなら、子の私が、父帝のために吐蕃を排除しましょう」と上奏し、吐蕃との通好を絶った(『旧唐書』迴紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』卷二二三)。拙稿「和蕃公主を通じての唐の外交戦略」(『総合女性史研究』第三一号、二〇一四年三月) 一一頁、二一―二二頁も参照。なお、馬千頭という数について、林俊雄氏は、これがウイグルに守られていない事を指摘している。林俊雄「ウイグルの対唐政策」(『創価大学人文論集』第四号、一九九二年三月) 一二七頁。
- (15) 貞元十年の唐と南詔の会盟については、『旧唐書』卷一九七南詔蛮伝、『蛮書』卷一〇、前掲註(3) 拙稿「二〇一」一五七頁、前掲註(1) 拙著「二〇一三」三三四―三三五頁、前掲註(5) 拙稿「二〇一五」五六―五七頁、貞元十七年の唐軍による吐蕃軍撃破については、『旧唐書』卷一四〇韋臯伝、吐蕃伝、佐藤長「古代チベット史研究」下巻(同朋舎、一九七七年、初版は一九五九年) 六八四―六八六頁を参照。
- (16) 唐・ウイグル・南詔の吐蕃包囲網については、前掲註(15) 佐藤長「一九七七」、前掲註(8) 岩尾一史「二〇一四」も参照。
- (17) 大澤正昭「唐末の藩鎮と中央権力」(『東洋史研究』第三二卷第二号、一九七三年)、日野開三郎『東洋史学論集・第一巻・唐代藩鎮の支配体制』(三一書房、一九八〇年)、辻正博「唐朝の対藩鎮政策について」(『東洋史研究』第四六卷第二号、一九八七年)、堀敏一『唐末五代変革期の政治と経済』(汲古書院、二〇〇二年) など。
- (18) 河湟は、黄河と湟水の流域である。佐藤長氏は、河湟を青海山脈の南北麓地帯に相当すると指摘した。佐藤長「吐蕃伝」(『旧唐書・新唐書』訳注)(『騎馬民族史3―正史北狄伝』平凡社、一九七三年) 一五八頁注七。憲宗の「河湟奪回」については、『旧唐書』卷一三三、李愬伝で「隴右奪回」と記されているため、本稿では河湟と隴右を同一地域と解釈する。
- (19) 元和四―五年の会盟交渉については、前掲註(6) 李天石「二〇〇二」四三―四五頁、前掲註(6) 馬勇「二〇〇九」一〇六頁、前掲註(3) 拙稿「二〇一」一五五―一五六頁、一五八頁、前掲註(1) 拙著「二〇一三」一二三頁、三二八頁、前掲註(5) 拙稿「二〇一五」四四頁が、わずかに取り上げている。
- (20) 吐蕃による間諜の派遣、劉闢と吐蕃の関係については、前掲註(10) を参照。
- (21) 『資治通鑑』卷二三八、元和四年七月条に「李絳」対曰「万一餘道或相表裏、兵連禍結、財盡力竭、西戎、北狄乘間窺竄。」とある。
- (22) 『資治通鑑』卷二三八、元和五年三月条に「諸軍討王承宗者久無功、白居易上言：臣聞回鶻、吐蕃、皆有細作、中国之事、小大盡知。今聚天下之兵、唯討承宗一賊、自冬及夏都未立功、則兵力之強弱、資費之多少、豈宜使西戎北虜一一知之。忽見利生心、乘虛入寇、以今日之勢力、可能救其首尾哉。」とある。『白氏文集』卷四二「請罷兵第二狀、請罷恒州兵事宜」、岡村繁『白氏文集』七下(明治書院、二〇一一年) 五六九―五七一頁参照。
- (23) 前掲註(15) 佐藤長「一九七七」、前掲註(3) 拙稿「二〇一」一五六―一五八頁、前掲註(1) 拙著「二〇一三」三三〇―三三二頁、前掲註(8) 岩尾一史「二〇一四」七三五頁。
- (24) 徳宗時代の唐と吐蕃の捕虜返還、建中会盟については、前掲註(3) 拙稿「二〇一」一、前掲註(1) 拙著「二〇一三」第七章、前掲註(5) 拙稿「二〇一五」四四―四九頁。
- (25) 前掲註(3) 拙稿「二〇一」一五四―一五六頁、前掲註(1) 拙著「二〇一三」第七章、前掲註(5) 拙稿「二〇一五」四八頁表三、四九頁、五四頁表八を参照。

- (26) 岡村繁『白氏文集』七上(明治書院、二〇〇八年)二〇八―二一六頁、二八一―二八八頁も参照。
- (27) 李天石氏は、吐蕃が安史の乱後、占領した領域の中で最も唐に接近した都市が、この三州であった事を指摘している。前掲註(6) 李天石『二〇〇一』四三頁。
- (28) なお、『資治通鑑』卷二四八、大中三年(八四九)七月丁巳条、八月乙酉条は、安楽州と長楽州を同じ都市であると解釈している。本稿もこれに従う。
- (29) 前掲註(17) 大澤正昭『一九七三』一七頁。
- (30) 前掲註(6) 李天石『二〇〇一』四六頁、前掲註(6) 馬勇『二〇〇九』一〇七頁。
- (31) 李愬が武寧節度使に任命されたのは、『旧唐書』憲宗紀によれば元和十三年七月。
- (32) 元和十三年―十四年の唐・吐蕃戦について、馬勇氏は、唐が李師道討伐に全力を傾けた事、軍事費の不足などにより、隴右奪回戦が阻害された事などを考察している。前掲註(6) 馬勇『二〇〇九』一〇七頁。また、岩尾一史氏は、八一八年(元和十三年)十月以降、オルドス方面の吐蕃軍の動きが活発になったが、攻撃が不調に終わったため吐蕃は和平路線に転じた」と論考した。前掲註(8) 岩尾一史『二〇一四』七三四頁。
- (33) 和蕃公主については、日野開三郎『唐代の和蕃公主』(『東洋史学論集・第九卷・北東アジア国際交流史の研究(上)』(三一書房、一九八四年三月)、藤野月子『王昭君から文成公主へ―中国古代の国際結婚』(九州大学出版会、二〇一二年三月)、前掲註(14) 拙稿『二〇一四』等を参照。
- (34) 筆者は前掲註(14) 拙稿『二〇一四』において、崇徽公主、咸安公主、太和公主のウイグルへの降嫁に、吐蕃を牽制するための外交戦略があった事を論じた。なお、藤野月子氏も、太和公主が吐蕃牽制のためウイグルに降嫁したと指摘している。前掲註(33) 藤野月子『二〇一四』一一七―一一八頁。本稿では、憲宗、及び穆宗の吐蕃対策・藩鎮対策とも連動させながら、太和公主降嫁の背景を、より明確にしたいと思う。
- (35) 羽田亨『唐代回鶻史の研究』(『羽田博士史学論文集』上・歴史篇、東洋史研究会、一九五七年)二二五頁、前掲註(14) 林俊雄『一九九二』ウイグル朝貢互市入寇年表を参照。
- (36) 日野開三郎氏は、二十万緡は仮性公主(宗室の娘)の資装費、五百万緡は真公主(皇帝の実の娘)の資装費であると考察し、唐はウイグルに仮性公主の降嫁を認めたが、ウイグルが真公主の降嫁を希望し、唐が淮西討伐に手間取っている隙に資装費を五百万緡に釣り上げた」と推察した。前掲註(33) 日野開三郎『一九八四』二六五―二六八頁。
- (37) 『新唐書』回鶻伝。吐蕃牽制については「北虜恃我威、則西戎怨愈深、内不得寧、国家坐受其安、寇掠長息。」とある。ほぼ同じ記事が『資治通鑑』卷二二九、元和九年五月条に見えるので、李絳の献策は元和九年頃になされた」と推測される。
- (38) 『資治通鑑』卷二四〇、元和十二年二月条、『旧唐書』殷侑伝、迴紇伝。『冊府元龜』卷九八〇、外臣部通好によれば、李誠が入廻鶻使に任命されたのは元和十一年十一月。
- (39) 『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、前掲註(15) 佐藤長『一九七七』五八九頁。
- (40) この城郭を、羽田亨氏、佐藤長氏は、ウイグルの都カラバルガスンであると解釈し、森安孝夫氏は、西州もしくは北庭であるとした。前掲註(35) 羽田亨『一九五七』二二九頁、前掲註(18) 佐藤長『一九七三』二〇〇―二〇一頁、前掲註(15) 佐藤長『一九七七』六七三頁、八四〇頁、前掲註(9) 森安孝夫『二〇一五』二五七―二五九頁参照。
- (41) なお、ウイグルは長慶二年(八二二)、唐の河北平定戦を支援するため三千の援軍を派遣したが、唐は、安史の乱の時、ウイグルが両京奪還の功を誇り傲慢に振る舞った事を思い出し、ウイグル兵に絹七万匹を授けて帰国させた。『旧唐書』迴紇伝、年表3参照。
- (42) 『新唐書』卷八三、諸帝公主伝、『唐会要』卷九八、迴紇伝。前掲註(35) 羽田亨『一九五七』二二四頁も参照。

(43) 前掲註(17) 大澤正昭「一九七三」一七頁。

(44) 吐蕃は、元和十五年(八二〇)二月、弔祭使の田泊が憲宗の崩御を伝えるためラサに赴いた際、長武城下で会盟することを要請したが、これは入寇のための口実であつた。『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二四一、年表2参照。